

父の十人の孫たちへ（君たちのおじいさんはどんな人だったのか。）

告別式の後、辻さんの車で送ってもらい、おかげさまで8時前には家に帰りました。それからお酒を飲んでかなり長いこと昔話をして深夜寝ました。少しお酒が残っていたので、今朝はいつものようには早く起きられなかったけれど、旅行用の荷物をまとめて午前八時前には研究室に到着、いつもと変わらない日常生活が始まりました。不思議なほどにいつもと変わらない。メールを送ったり、必要な事務処理をしたり、学生の学会発表の手直しをしたり。ただひとつだけ私の中に残ったものがあります。自分の父親が死んでから2日間、通夜と告別式の間誰かともっと何かを話したかったという思いです。君たちのおじいさんが入院してから、おじいさんの子供である私たち兄弟4人は、いろいろなことを相談し、おたがいにメールをやり取りしてきました。そのほとんどは事務的な連絡で、何か意見を述べたり感情を語ることはなかったのですが、行間にそれぞれの思いは伝わります。ですから、兄弟でいたり合ったり慰め合ったりそういうことをしたいというのとは少し違います。誰に何を話したいのかと問われても良く分かりません。新幹線の中でこの文章を書き始めました。16:00 東京発のぞみ 237号、12号車、19番A席でこれを書いています。

昨日の告別式では、時間をいただいてスピーチをさせていただきました。家族葬だからという理由で、私の父がどんな人だったのかを、父の孫たちに語りたいてと言って、父と私のいくつかの会話を君たちに紹介しました。普通は、こういう場合、故人の業績等の紹介などをするのでしょうか。何故そんな事をしたのかというと、誰かの心の中に私の父のことを深く刻み込んでおきたかったのです。告別式でのいくつかのスピーチからもわかるように、父は誰もが尊敬し愛する素晴らしい能力と人柄を持った人でした。最後の挨拶で兄が言った、「彼以上に頭の良い人にはあったことがない。」というのは、実は私もそう思っているのです。しかし、世間的にみれば、父は高名な哲学者でも、文学者でも、芸術家でも、科学者でも、政治家でもない。彼と直接付き合ったことがある人以外にはその存在を全く知られていない無名の人です。だだの隠居した元町工場経営者です。誰しもが著名・高名というわけにはいかないのだから、それはそれで構わないのですが、彼を直接知る人がいなくなれば彼の存在そのものなくなってしまう。私にはそれが悲しいのです。せめて、誰か、とりわけ孫である君たちの心の奥に父の存在を刻みつけておきたかった。それであんな話をしたのです。自分の父親は偉かったと自慢するつもりはありません。泰ちゃん、惣太郎君、素君、花ちゃん、周ちゃん、恵ちゃん、あゆこ。君たちには同じ話の繰り返しになるかもしれませんが、しかし、私は、あのスピーチだけではまだ十分に伝わっていないものがあるような気がするのです。あやちゃん、亮ちゃん、健、お爺ちゃんの死は突然でした。離れたところにいる君たちが通夜・告別式に来られなかったことは、残念だけれど当然です。君たちは、それぞれにお爺ちゃんにかわいがってもらいました。君たちにとっては、明るい風変わりなおじいさんという印象であったかも知れません。しかし、その背景

で、君たちのお爺さんがどんな体験をしてどんな考えを持っていたのか、もしよかったら、覚えておいていただけませんか。そして、君たちが孫を持った時に、その機会があれば、君たちのおじいさんがどんな人だったか、君たちの孫に話していただけませんか。

とは言ったものの、私は、お爺さんの子供時代のことや若い時のことを良く知りません。彼は、私たちにも昔のことを話さなかったからです。この話は、私が自分の父親と話した会話の断片をつなぎ合わせたものを、歴史的な背景とつなぎ合わせて、お爺さんが何を考えていたのかを私なりに推察したものです。

お爺さんは大正元年（1912）年12月26年に生まれました。この年のほとんどは明治ですから、最後の明治時代生まれとも言えるかもしれません。世界史的にみると第一次世界大戦(1914)の2年前です。戦前というと、軍国主義に様に塗りつぶされた暗い時代を考えてしまいますが、大正デモクラシーというどことなく明るいのびやかな時代がありました。その時代の空気の中で、おじいさんは少年期・思春期を過ごしました。彼の明るい雰囲気は、そんな時代の空気を伝えているのかもしれません。しかし、そんな時代の中で、お爺さんとお爺さんの家族は大変につらい思いをしました。おじいさんが生まれたころ一家はとても豊かだったようです。お爺さんの父親、つまり私たち兄弟のお爺さんは、山梨の地方銀行の頭取だったらしい。また、親しくしていた親せきは牧場を経営していた。この牧場のチラシのようなものが残っていて、それをお爺さんの親戚（お爺さんが子供のころ一緒に遊んでいた人らしいが、どういう人だかよくわからない。我が家の姓だったから、近い親戚でしょう。）から一度だけ見せてもらいました。とにかく一族はとても豊かだったらしい。お爺さんが小学生だった時、この銀行が倒産して、一家は、たくさんの借金を抱えて夜逃げをするように東京に出てきます。汽車に乗って、当時は結構長旅だったようです。お爺さんの妹に当たる寿子おばとお爺さんが、その旅のことを思い出して話しているのを一回だけ聞きました。駅で汽車が停車している間に、お爺さんは水を飲みに行き、その時帽子をなくしたらしい。どんな帽子だったのだろう。夜逃げとは言いながら、それまではお金持だったのだから、結構、良い身なりで旅をしたのではないだろうか。東京に出てきて住んだのは、芝か神田神保町か良く分かりません。仕事は何をしたのかも良くわかりませんが、中華料理屋のようなこともやったらしい。多分それもうまくいかなかった。この時代が最も貧乏だったようです。お爺さんに、小学生の時はどんな子供だったのかと聞いたことがあります。答えは、とにかく学校側にとっては迷惑な存在だったろうというものでした。貧乏だと言う以上に多くの借金を抱えているのですから。授業料の支払いは愚か弁当だって持って行けたかどうか疑わしい。あまりしっかりしたものを食べていないので栄養状態が悪く、栄養改善をするようにと親が学校から注意されたそうですが、親としては対応のしようがなかった。そこで、お爺さんは自分で田んぼのようなところでタニシをとって煮て食べたそうです。彼の父親、君たちのひいおじいさんは派手な性格で、お

爺さんには、家族以外にもお爺さんの兄弟にあたる人がいたらしい。そういう中で、大きな借金を抱えて没落するのですから、贅沢を知っているだけに、もともと貧乏だったよりも悲惨でしょう。とにかくどうしようもなかったようです。私の仕事は発展途上国の貧困問題を解決するための研究です。途中で研究対象を変えて現在の専攻に移りました。教授として現在の専攻に移った時困ったことがありました。幸か不幸か私は、貧困を経験したことがありません。これは君たちのお爺さんのおかげです。しかし、経験したことのない良くわからないものを解決しろと言われても何を解決すれば良いのかわかりません。考えること自体に無理がある。困ったのですが、うまい手を思いつきました。自分の父親は元貧困だったのだから、貧困には詳しいはずだ。彼に聞けばわかるだろうということです。お爺さんの答えは面白いものでした。貧困という状態は、じっとおびえながら何かがあるのを待っている感じだそうです。このことは、お爺さんが書いた本の中にも出てくるかもしれません。良いことが来るのかさらにもっと悪いことが起こるのか、わからないけれどとにかくじっと待っているしかない。一度貧困になると、自ら何かを積極的に選択して生きることができなくなって、とにかくじっと何かを待っているしかないのだそうです。これは「貧困とは選択を奪われることだ。」という、ノーベル経済学賞をとったアマルティア・センの貧困の説明と同じですね。開発関係の研究者にはセンは人気がありますが、センのこの言葉を知った時に、私は、別にどうってことはない人だなと思いました。だって、自分の父親からそのことを直接に聞いているのですから。それはそれとして、この感覚はお爺さんの人柄・個性を考える上で重要だと思っています

貧困だったけれど、一家に全く希望がなかったわけではありません。お爺さんたちは4人兄弟ですが、お爺さんは次男です。長男のお兄さんはとても秀才だったらしい。お爺さんよりもはるかに勉強ができて、物理学校（東工大の前身）に入学して勉強していたそうです。このお兄さんは一家の希望の星だったのだと思います。お爺さんは、それに比べてどちらかというと気楽な次男坊という立場で、明るく面白い少年だったようです。直接にお爺さんを知っている君たちにはお爺さんが思っていた明るい雰囲気はわかるでしょう。でも、このお兄さんは病気になって死んでしまいます。お爺さんは、突然、お兄さんに代わって、家族のために頑張らなくてはならない立場になったのです。受験に失敗したのでしょうか。お爺さんは物理学校には行きませんでした。お爺さんが勉強したのは東京神田電機学校です。今の電機大学ですね。でも、もともと頭が良かったし勉強も好きだったのでしょう。16歳の若さで電機学校を卒業してしまいます。大きな電気会社の送電技師として就職が決まっていたらしい。当時の送電は先端技術だったでしょう。お爺さんは頑張って、亡くなったお兄さんに代わって一家の希望の星になったのです。ところが、不幸というものはそういうものなのでしょう。今度はお爺さん自身が結核になって、療養生活ということになり、就職はできなくなってしまいます。お爺さんは、自分もやがて死ぬのだらうと思っていたそうです。当時は抗生物質がありませんから、八ヶ岳の中腹あたりで療養生活をしていたようです。お爺さんが山歩きが好きなのはその時からかもしれません。

電車が京都駅に着きます。そんなに長い文章を書く気はなかったのですが、長くなりました。残りはホテルで書きます。

お爺さんは死にませんでした。結核は治り普通の生活に戻ります。焼き場に行った人にはわかりますね。大柄な人ではなかったし、どちらかといえばほっそりとした体だったけれど、お爺さんのお骨は骨太で、とても97歳で死んだ人の骨には見えなかった。本質的には頑健で丈夫な体質だったのでしょうか。このころ、一家の経済状態も以前より大分回復していたようです。でも、お爺さんには仕事がありません。潰れかけた町工場があり、それを引き取らないかと持ちかけられて、その町工場をやることになったようです。これが、現在兄が引き継いでやっている工場です。ヘラ絞りの工場ですが、お爺さんはヘラ絞りなど知りませんから、工場で働いていた職人さんにその技術を教わったようです。ヘラ絞りはヘラ棒一本で仕事ができますから、当時はそういう職人さんがたくさんいて、流しの職人として各地を渡り歩く人もいたようです。これはかなり若い時のことです。226事件の時、職人さんたちを連れて、野次馬として、青年将校たちが占拠している現場を見に行っただけです。226事件は1936年ですから、お爺さんが24歳の時です。今の君たちと同年代あるいはもっと若い。一緒に行った職人さんの中には、お爺さんよりも年長の人もいたでしょうね。あの歴史的な大事件を面白がってワイワイ見物に行く若い町工場の経営者、この軽薄で軽妙な感じが私は大好きです。

このころのことだと思います。お爺さんは留置所に入れられています。俊郎さんの車が接触事故をおこし富阪警察署に行ったことがあります。私も何かの必要があって富阪警察署に行ったのですが、家に帰ってそのことをお爺さんに報告したら、懐かしそうな表情をして、富阪警察署の様子を聞きました。どうしてそんなことを聞くのかと聞き返したら、実はあそこの留置所にいたのだと言いました。罪名は国家総動員法違反です。どんな容疑だったのかを聞こうと思いましたが、それ以上の話はありませんでした。町工場を営んでいた若者ということなので、私は物資の横流しとか材料の調達とかそういうことなのかと想像していました。告別式の時に、細田の実さんにこの話をしたら、お爺さんの父親のひいおじいさんも官憲に引っ張られたことがあると言っていました。思想犯のような感じなのですが、お爺さんを知っているあなたたちはわかるでしょうが、その父親であるひいおじいさんに思想などありません。いずれにしてもむちゃくちゃな理由です。ようするに、お爺さんたち一家の持っていた雰囲気が入らないということだったのでしょうか。また、実際、いろいろな人がお爺さんの周辺を出入りしていたのだと思います。ということで、お爺さんの一家は官憲が嫌いです。

お爺さんは兵隊に行っています。1回だけだったのか、2回だったのかわかりません。私が直接聞いたのは、最後は千葉の方で、飛行場の守備をする部隊だったということです。敗色濃厚で、守るべき飛行機もあまりなかったようすし、相手は航空機で攻撃してくる

のですから、その装備を考えると守備隊がいても何の役にも立たないでしょう。守備中に敵機の銃撃を受けて、隊の何人かが死んだと言っていました。お爺さんは戦争のことを積極的に話すということはしませんでした。その隊にいた時に終戦になります。敗戦の事実はお爺さんたちには直接伝わらなかったようです。あるときを境に、具体的な命令が来なくなり、やがて、しょうがないから解散してそれぞれ家に帰ろうということになったようです。お爺さん個人にとってこの時期は悪い時期ではありません。最初の結婚をして、美祢子さんが生まれています。日本は戦争に負けたけれど、お爺さんは幸せだったでしょうね。何しろ国家総動員法違反でいじめられているのですから、国の敗戦を嘆かなければならない理由はどこにもない。でも、この幸せは長く続きません。美祢子さんを産んだ最初の奥さんは間もなく死にます。どうして亡くなったのかは知りません。そのことを直接、お爺さんに聞いたことはありません。私がそのことを知ったのは大人になってからで、純さんから聞きました。告別式の時に、細田の透さんに美祢子さんのお母さんがどんな人だったのか知っていたら教えてくれないかと尋ねたら。写真では見たことがあるがどんな人かは直接には知らないということでした。

また長くなりましたね。今夜は寝ます。

そのころ、お爺さんの両親は山梨の田舎にもどっていました。美祢子さんは、山梨のお爺さん両親の家にしばらく預けられます。北林の邦太郎さんと一緒だったらしい。細田の実さんや透さんも、ときどき美祢子さんが預けられていた家に遊びにいていた。お爺さんたちの兄弟の子供たち（従兄弟たち）は近いところで一緒に育ったようです。お爺さんは、再婚して、美祢子さんを東京に引き取ります。再婚した相手が、ゆりさん、純さん、私の3人の母親です。3人の子供は1歳ずつ年が違う年子で立て続けに生まれます。そして、また不幸が起こります。再婚相手は体の弱い人でした。今度は、その再婚相手が、結核になってしまうのです。重篤な結核だとわかった時には、三人目の子供つまり私を妊娠していました。お爺さんと私の母親は私を産むかどうか悩んだようですが、産むことを決めました。私を産むと母親は入院しました。どのくらい入院していたのかは知りません。なにしろ、私は生まれたてですから記憶がありません。その間、子供たちがどうしていたのかも聞いたことはありません。そんなに長くはなかったのかもしれません。そのころ、抗生物質の使用が一般化します。抗生物質漬けのような治療で、結核はなおります。1950年ぐらいのことです。そのころ結核はそれまでの不治の病ではなくなったのです。写真が残っています。私は赤ん坊ではなくて幼児になっていますから。病気が治って少し時間がたつてからののだと思います。母と私が池で魚を掬っています。多分、お爺さんが撮ったのでしょう。静かな幸福感が漂っている写真です。しかし、この時点でも不安がなかったわけではない。体が弱いというのとは少し違うかもしれませんが、私は、1年ぐらいの間隔で大病をする手のかかる子だったのです。私の母も兄弟の多い子沢山のうちに生まれています、

母は兄弟の中で最も上の子ですが、母のお母さん、つまり私のおばあさんも、母を産むとすぐなくなっています。美祢子さんのお母さんと同じです。母の弟たちの何人かは、子供時代に早死にしています。母は中でも一番下の弟をととても可愛がっていたらしい。明るい活発な子だったようですが、この人も夭折します。兄弟の一番下で病気がちということで、私の母親は死んだ弟と私を重ね合わせて見ていました。そして、この子も早死にするのではないかと不安を感じていたようです。そういうこともあって私は両親に大切にされて育ちます。これには問題がなかったわけではありません。良く考えて見ると、私は生まれただてなのだから、母親という明瞭な認識はなかったでしょう。母が入院していてもさびしくなかったはずですが、でも、私より1年早く生まれていた純さんは、ものごころがついていたはずですが、母親を慕っていたはずですが、さびしかったのは純さんでしょう。ところが、戻ってきた母親の関心は弟の方に強く向けられている。悪意はないし、どちらかが可愛いということではなくても、結果的にそうなってしまったのです。そういうところが純さんの聡明でやさしいところなのですが、弟に悲しい思いやつらい思いをさせない。弟が喜んでいと母親が喜ぶと感じていたようです。素君、花ちゃん、周君、恵ちゃん。君たちは、君たちのお父さんがどうしてあんなにおじさんのことを大切にして、おじさんがしなければならぬ仕事でも引き受けたり、おじさんに経済的な負担をかけないようにしたりするのか良くわからなかったでしょうね。自分たち家族以上におじさんのことに心を配る。あるいは、そのことに不満を感じているかもしれません。そのことについては、大変申し訳なく思っていますが、それにはこういう背景があったのです。とにかく、私たち4人兄弟はとても仲が良かった。喧嘩をしなかったという意味ではありません。商売をしているうちはたいていそうなのですが、家族労働なので、忙しい時は子供たちも含めて家族で働きます。そういうときはそれぞれの子供が自分のできることをします。私は子供心にもそうやって家族で働くことがうれしかった。日常生活の中に兄弟のいたわりのようなものがあって、それが心地よかったです。もっとも、私は一番年下だったので、いたわられる一方だったのでしょうね。町工場の経営は、世の中の景気に左右されますから、当然、良い時も悪い時もありましたが、全体としてみれば、朝鮮動乱による特需、それをきっかけにした経済復興、高度成長期と世の中全体も右肩上がりでした。この時代はお爺さんにとっても幸せな時代だったでしょう。でも、お爺さんは、工場の経営そのものについては、覚めたところがありました。あまり興味がなかった。私たち家族を含め、親戚その他あの町工場の存在に依存している人たちが生活していればそれで十分と思っていたようです。お爺さんはとても碁が強かったということは知っていますね。お爺さんは毎日碁を打っていた。また、ときどき絵を描いていた。書も達筆（というのとは少し違いますね。独特の風格のある書を書いて）。どれもみな本格的に勉強してそこに時間を集中した。音楽も好きでした。現実と虚構のとらえ方が、普通の人とは違っている。というか正反対でした。現実の方が移ろいやすく不確かなもので、今はやがて全く違う今にとって代わられてしまう。虚構は、実在しないのだから、何かにとって代わられることはない。素人の碁などは、棋

譜ものこらないし、誰も覚えていないだろうが、夢中になって考え、そして勝利を導きだす。その快感は確かに自分の中に残る。上手に言えないのですが、そんな感じだと思います。

1973年、お爺さんの2番目の妻、私たちの母親が死にます。54歳でした。美祢子さんとゆりさんはもう結婚していました。もう少し生きて、純さんや私が家庭を持てば、家族は静かに幸福に終わりを迎えたという話になったでしょう。そうはならなかった。突然入院して突然死にました。私は大学の4年生になっていましたから、そのころのことは鮮明に記憶しています。でも、少し長くなるので、別に書いたものがありますので、それも読んでください。結核だったものを、抗生物質漬けにして生き残ったのです。やはりもともと体が弱かったのでしょうかね。この時、お爺さんは61歳でした。よく、晩年、妻に先立たれた夫は、すぐに衰弱して弱って死んでしまうということをいう人がいます。私も実際、自分の父親について、そのようなことを面と向かって言われたことがあります。私はその時、「俺の親父はそんなにやわな男じゃない。まあ見ていろよ。」と思いました。実際、そうならなかったことは皆さんが知っていますね。やがてたまさんと再婚し、つい3日前まで生きていて、97歳で死んだ。私の母親が死んだ時お爺さんはとても辛く、悲しかったと思います。2度も妻に先立たれたのですから。しかし、悲しみやつらさに耐えて、現実を冷静に受け入れる、柔軟なしたたかさをお爺さんは持っていました。こどものころからの様々な経験からそういう能力が涵養されていたのでしょうか。やがてたまさんと再婚し、秩父の廃村に2人でくらししました。お爺さんに一生は長いものでしたから、この先にも様々な話がありますが、これ以後のお爺さんの人となりや生活は、君たちの知っているとおりにです。君たちが思いたすお爺さんは、大きな秋田犬を乗せてランドクルーザーを運転する姿でしょうか。こたつで面白いことを言っている姿でしょうか。さっそうと山を登っている姿でしょうか。碁を打っている姿でしょうか。それについては、君たちが覚えている、それぞれのお爺さん像を残せば良いでしょう。

このように、お爺さんの一生には様々な起伏があったのですが、言いたいことは、そのことではありません。人間万事塞翁が馬などと言いたいわけではありません。告別式でのスピーチの後に、細田の実さんから「とうとうおじさんには碁で追いつくことができなかつたけれど、貴方のスピーチを聞いて、おじさんの碁がわかったような気がする。最初から圧倒されることはなかった。しかし、結果的に負けてしまう。碁は一手一手打つたびに局面が変わる。世の中が時間とともに移り変わっていくように。おじさんは、バランスを取りながらそうした局面の変化をじっと見つめていて、そして、必要な時に最も良いタイミングで動く。それに負けていたんだと思う。わかった様な気がする。」と言われました。人の生死や世の中の流れは、予測できないしそれに抵抗することもできない。その現実を柔軟かく受け止めて、流れに身をまかせながらも、じっとその変化を見つめて力を蓄える。そして、良いタイミングでその力を使うというのがお爺さんの生き方だったようです。一

一度、世の中にはどうしても解決できないような問題もあるけれど、それにはどのように対処したら良いのかと聞いたことがあります。大きな木の切り株があつて、それを抜きたいのだけれど、根が深く、広く張っていて抜くことができない。そういう場合は、対症療法的に、切り株から生えて来るあたらしい枝を、何年にもわたって丁寧に刈り取ってあげればよいのだそうです。そうすると、やがて木の力が衰えて、根の広がりがなくなり抜けるようになるそうです。つまり、世の中の状況が変わって、それまで困難だった問題が、簡単に解決してしまうことがあるのです。お爺さんらしい答えです。「抜本的解決」などという言葉をやたら使う人を馬鹿にしているようですね。困難や不幸があつても、その現実を柔軟に受け止めて、絶望もしないし、過剰な期待も持たない。そういう骨太なところがお爺さんらしいのです。

もう一つ伝えておくべき大切なことがあります。お爺さんの絵を知っていますね。上手とか下手とか、好きとか嫌いとか、そういうことを離れて見てください。比較的暗い、落ち着いた画面に、日常の道具や農具、花、動物などが、描かれています。ことさらに、一つ一つを取り上げて描いています。書かれた対象物が、そこに確かに今存在するのだけれど、それは存在である以上、今だけ存在するのではない。それはその対象物なりの歴史を持っていて、様々な経緯の末にそこに存在し、この後も歴史を刻んでいく。そのように見えます。農具は誰かが使っていたのでしょうか。その人がどうなったのかは知らないけれど、何故かそこに放置されている。花の種はどこかから飛んできて、そこで芽を出したのだろう。虫が飛んできたかもしれないし、動物がにおいをかいだかもしれない。存在するものはすべて皆、それぞれの歴史を持って、変動する周辺とともに存在するのだ。お爺さんはそういうことを感じながら、あのような絵を書いていたのでしょうか。お爺さんの柔軟でしたたかな持久力の背景には、そのようなものの見方があったのだと思います。お爺さんはお坊さんに向かって、宗教家に他人の人生など語るなどできないと言ったそうです。

書き始めた時は、4日前で、新幹線の中でした。その後、1日の仕事を終わるとホテルのベッドの中で少しずつこれを書きました。今、帰りの新幹線(8:16 京都発、のぞみ 110 号、4号車 13 番 D 席 9)でこれを書いています。もうじき新横浜です。長い話につきあってくれてありがとう。ずいぶん長くなってしまったけれど、もう終わります。最後に、私がお爺さんとした最後の会話を紹介します。

お爺さんがなくなる3週間ぐらい前のことです。これが私が生前のお爺さんと会った最後です。二人だけでした。もうずいぶん体が弱っていて声を上げることも大変だった時です。でも時々眼を開けました。その時も目を開けて、「どうだね。」と言ったのです。そして私は「おかげさまで元気です。」と答えてしまいました。でもこれは変ですね。死にそうなのはお爺さんで、私は見舞いに来ているのです。立場が反対です。返事をしてすぐに苦笑いをしてしまいました。「どうだね。」というのは、晩年、私がお爺さんをたずねると必ず初



めに口にした言葉です。そして、私はかならず「元気です。」と答えていました。そのあと、お爺さんは必ず、「理恵ちゃんはどうしている。」「あゆこは。」「健は。」という風に私の家族の様子をたずねました。多分、お爺さんは私が「元気です。」と答えることを予想していた。つまり、私が場違いな答えをすることを想定して「どうだね。」と言ったのだと思います。

告別式で純さんが、病院で点滴を受けながら死んだのは、お爺さんの本意ではなかった。かわいそうなことをしたと泣きました。しかし、私は必ずしもそうは思っていません。お爺さんの容体が悪くなってきた時に、私たち4人の兄弟は話し合いました。もう大人になっていますから、4人の兄弟のお爺さんに対する思いは少しずつ違ってきます。でも、そういうことはお互いに了解しながら、皆で協力し合って介護をしようということになりました。初めに普通の治療行為としての医療があり、ある日を境に終末医療が始まるのではない。それは少しずつ変化しながら連続的につながっています。ある時点で、私たちはお爺さんの命がやがて終わるのだということを知りました。その中で、私たちはお爺さんに何をしてあげられるのか。お爺さんはあの状態で何を望んでいるのだろうかとそれぞれに考えました。お爺さん介護に最も献身してくれたのは美祢子さんです。そしてお爺さんの長い一生が終わった今、お爺さんの存在が私たちにあたえてきたもの、あの状態になっても私たちに与え続けているものの意味を、最も長くお爺さんの一生と付き合った美祢子さんは理解していたのだと思います。

確かに不本意な形にはなったけれど、絶望だけがなかったのではない。身体を動かすことも、口を聞くこともままならなくなったけれど、目が覚めた時のお爺さんの意識は明晰だったと思います。そして、息子をひっかけて苦笑いをさせようと思っていた。かなり体力的には大変な中でそれを実行した。そういう状況でもお爺さんは自分の生き方を貫いていた。お爺さんはそういう人でした。

(最後に、素君、花ちゃん、周君、恵ちゃんにお願いがあります。君たちのお母さんに、お爺ちゃんの面倒をよくみてもらってありがとうとおじさんが感謝していたと伝えてください。)